様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４５１０
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０３４８

研究課題名（和文）エミリ・ディキンスンと日本

研究課題名（英文）Emily Dickinson and Japan

研究代表者
鵜野　ひろ子（UNO, Hiroko）

神戸女学院大学・文学部・教授

研究者番号：３０１４５７１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　エミリ・ディキンスンの植物標本帳には、当時の米国では手に入るはずのない日本の花が存在する。ハーバード大学植物標本館等で調査の結果、ペリーの日本遠征隊が収集した標本がワシントンに到着した直後に彼女が当地を訪れたこと、その直後に家に温室が造られたこと、実際に植物を採集した一人、サミュエル・ウィリアムズがディキンスン家と関係のあるアメリカン・ボードから派遣された宣教師であったこと等から、彼女が遠征隊の植物標本の一部をもらった可能性が高いと結論付けた。
　またウィリアム・クラークから日本の植物を手に入れた可能性もあることがわかった。新島襄との関係や当地の日本ブーム等については、今なお調査中である。

研究成果の概要（英文）：In the herbarium made by Emily Dickinson there are several species of Japanese flowers which could not have been obtained in the United States those years. As a result of investigating at Harvard University Herbarium and so on, I concluded that there is a possibility that some specimens are from Perry's expedition to Japan, considering that she visited Washington just after their arrival there, that a conservatory was built at her house just after the visit, and that one of the collectors on the expedition, Samuel Williams, was a missionary sent by American Board, which was connected with the Dickinsons.
William Clark turned out to be another possible route. He lived in her neighborhood as Professor at Amherst College and had been keeping a herbarium since his boyhood. Besides, he also made a conservatory in his house at the same period as Dickinson's. The Japonism in New England in the 1860s and Dickinson's connection with Joseph Neesima are still under investigation.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：エミリ・ディキンスン　ペリーの日本遠征　植物標本作成　日本の花　日米文化交流　ウィリアム・クラーク　新島襄

１．研究開始当初の背景

(1) 平成 20 年度から３年間、「エミリ・ディキンスンと東洋―新島襄とウィリアム・クラーク―」という題で調査・研究した結果、エミリ・ディキンスンの 20 歳代の頃（1850 年代）の日本の鎖国と開国についての知識が、彼女の 30 歳頃からの隠遁生活に大きな影響を与えていたことがわかった。しかし 1840 年代、1850 年代の、彼女が購読していた地方新聞をマイクロフィルムで読むなど、この調査に時間がかかったので、新島襄やウィリアム・クラークについての資料収集が中途半端なものに終わった。そこで今回、引き続きその資料収集をすることとした。

(2) 前回の研究の際、ディキンスン家の書籍の中にペリー総督の『日本遠征記』があることがわかった。また彼女の兄の家には東洋の陶器などが多数保存されていたことがわかり、それらを写真撮影することもできた。このように、日本の開国後も、ディキンスン家では日本に対して興味が持たれていたことは確かである。そこで、その点について、さらに詳しく調査することとした。

２．研究の目的

(1) ディキンスンの 30 歳代（1860 年代）、40 歳代（1870 年代）における日本についての情報がどのようなもので、彼女がどのような影響を受けていたかを研究する。

(2) ディキンスンの住んでいたアマストの町には、札幌に行ったウィリアム・クラークや新島襄がいた時期があるので、彼らと交流があったかどうか、あったとすれば、彼らからどのような日本についての情報を得ていたかを調査する。

(3) 米国以外では日本が最もエミリ・ディキンスンの研究が盛んな国と言われ、しばしばそれは何故かと尋ねられる。彼女の美学と日本人の美学に共通のものがあるのではないかと推測できるが、彼女の日本についての知識を知ることで、その謎に迫ることができるのではないかと思う。

３．研究の方法

(1) アマスト大学及びマサチューセッツ大学において、ウィリアム・クラーク関係の資料を収集する。

(2) アマスト大学等で新島襄関係資料の収集を継続する

(3) ディキンスンが購読していた 1860 年代、1870 年代の地方新聞（マイクロフィルム）等から当時の日本についての情報がどのようなものであったかを調べる。

(4) 1855 年、ペリーの日本遠征時に収集した品物や植物、また幕府からの贈り物などがワシントンに届いた直後に、ディキンスンが当地を訪れていた。そこで、ワシントン DC 等で、彼女が見たかもしれない、また手に入れていたかもしれない日本の品々や植物について調査する。

４．研究成果

(1)　エミリ・ディキンスンは生前、詩人としては全くの無名であったが、花の栽培に長けていることは知人の間で知られていた。珍しい花も温室で育て、折に触れ、友人への手紙に花束を添えていた。今回、彼女の購読していた地方新聞『スプリングフィールド・デイリー・リパブリカン』紙を読んでいたところ、偶然、1862 年のハムデン園芸展で、彼女がブーケの部門で２等賞を得ていたことがわかり、花束を作ることにも長けていたことがわかった。このことは、下記の雑誌論文③の中に記した。

(2) 2006 年にハーバード大学出版局からエミリ・ディキンスンが作成した植物標本帳の復刻版が出版されたが、その標本帳の中に、当時の米国では手に入らないはずの日本産の花の標本が数点ある。そこで、どうしてそのような花が彼女の手に入ったかを調べることにした。その中の日本産スイカズラについては、Judith Farr が *The Garden of Emily Dickinson* の中で、1862 年に George Rogers Hall によって日本からロングアイランドにある Parson という養樹園にもたらされたものが詩人の手に入ったと推測しているが、それならば彼女の標本帳に *Lonicera japonica* と記されたはずである。しかし実際には、*Lonicera* ― としか記されていないので、その推測は間違っていると思われる。一方、ペリーの日本遠征隊が採取した標本がワシントンに届いた直後に彼女が当地を訪れていること、遠征を推進したダニエル・ウェブスターと彼女の父親が懇意だったこと、ペリーの『日本遠征記』がディキンスン家に保管されていること等から、標本がハーバード大学のエイザ・グレイ教授に判定される前に、彼女がペリーの遠征隊の採取した標本の一部を手に入れた可能性が高いと結論付けた。このことは論文③で発表した。

(3) 上記にある論文③を発表後、ハーバード大学の植物標本館（HUH）が保管するエイザ・グレイ教授の植物標本のデータベースに *Lonicera japonica* があることがわかったが、その花はペリー遠征隊の採取したものではなかった。一方、同じデータベースに、日本遠征隊員であったサミュエル・ウィリアムズとジェイムズ・モロウが日本で採取した植物のリストがあり、『日本遠征記』の植物標本リストにある 351 種の内、51 種が保管されていることがわかった。そこで、実際に HUH に行って調べてみたところ、あまりに大量の

標本が保管されているため、データベースに入れるどころか、まだ存在の認定もされていない標本が多数存在することがわかった。HUH の研究員と共に遠征隊の標本リストとディキンスンの標本リストに共通にある植物 14 種を探したところ、4 種以外は全て見つかり、認定された（後に、2015 年 3 月の HUH での 2 回目の調査で、もう 2 種見つかったが、未発表）。サミュエル・ウィリアムズがディキンスン家と関係のあったはずのアメリカン・ボード（この点について、後に証拠を発見したが、未発表）から派遣されていた宣教師であったこと、詩人がワシントンを訪れた直後に、自宅に温室を造ったこと等も考慮すると、彼女の標本にある日本の植物標本は遠征隊の採取したものの一部であった可能性がますます高まった。このことは、雑誌論文①と②で発表した。

(4) エミリ・ディキンスンより４歳年長のウィリアム･スミス･クラークは、日本では 1876 年から 77 年にかけて札幌農学校で人材を育てたことで有名であるが、ディキンスン家と深い関係のあるアマスト大学で学び、卒業後はドイツに留学した後の 1852 年から、1867 年にマサチューセッツ農科大学の学長に就任するまでの約 15 年間、アマスト大学で植物学と化学の教授を務めた。現存するディキンスン関係の書簡の中には、彼との間に交換された手紙は見つかってはいないが、二人の間に何らかのつながりがあったのではないかと推測し、調査した。その結果、彼がアマスト大学の教授時代、ディキンスン家のすぐ裏手に家を構えていて、隣人であったことがわかった。また、彼は高校時代から植物標本を作成することに熱心で、ドイツで隕石について博士論文を書いていた間も植物採集をしていたこと、さらには、家族にも、学生にも、標本を作成することを熱心に勧めていたことなどがわかった。また週末には一般人対象の植物講座も担当し、植物採集を指導していたことも分かった。それゆえ、隣人のエミリ・ディキンスンとも、共通の趣味である園芸や植物標本作成を介して交流があり、珍しい海外の植物を交換するなどしていたのではないかと、推測される。また、彼はロンドンのキュー・ガーデンの温室を見学しており、ディキンスンとほぼ同時期に自宅に温室を造っている。一般家庭に温室を造ることはまだ珍しい時期でもあり、詩人が自宅に温室を造る際に、彼がアドバイスをした可能性もある。このことは、論文①の中で発表した。

(5) 詩人の購読していた地方新聞や雑誌に掲載されている日本関係の記事ついての調査は、1860 年代に入ると量が増大するので、まだまだ時間が必要である。しかし 1860 年には日本の幕府の派遣した遣米使節団について、また初めて日本から輸入された商品の広告など、興味深い記事を多数読むことができ、1860 年代初めには日本ブームがあったこともわかった。これらの資料は整理中である。

(6) ペリーの遠征隊が日本から持ち帰った日本の品々がワシントンに到着した直後に、エミリ・ディキンスンは当地を訪れているので、植物標本だけでなく、日本の物産を見ている可能性が高い。そこで、ワシントンのスミソニアン・インスティチュートで、ペリーやその遠征隊員が米国に持ち帰った日本からの土産物を見せていただき、写真撮影した。これらについては、いずれ発表の予定である。

(7) 私自身と母の病気治療のため、研究期間を１年延長していただいたのであるが、この間も、母親の大腿骨骨折、手術、病気の悪化などのため、資料収集を延期するなど、研究が遅れた。そのため、新島襄についての資料は未整理のままである。しかし、いずれ整理し、発表する予定である。

＜引用文献＞

① *Emily Dickinson's Herbarium.* A Facsimile Edition. Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard UP, 1998. Print.

② Farr, Judith. *The Garden of Emily Dickinson.* Cambridge, Mass.: Harvard UP, 2004. Print.

③ Hawks, Francis L., ed. *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, Performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy.* Washington: Beverley Tucker, 1856. Print.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

① 鵜野 ひろ子、エミリ・ディキンスンと日本の花（2－2）、神戸女学院大学論集、査読無、61 巻、2 号、2014、195－214

② 鵜野 ひろ子、エミリ・ディキンスンと日本の花（2－1）、神戸女学院大学論集、査読無、61 巻、1 号、2014、155－167

③ 鵜野 ひろ子、エミリ・ディキンスンと日本の花（１）－ *Lonicera Japonica* 日本産スイカズラ－、神戸女学院大学論集、査読無、60 巻、1 号、2013、193－203

④ Hiroko Uno, Emily Dickinson's

Seclusion and Japan, 神戸女学院大学論集、査読無、58 巻、2 号、2011、129－150

〔学会発表〕（計　4　件）

① Hiroko Uno, Emily Dickinson and Japanese Flowers, Triennial Conference of the Society for the Study of American Women Writers, 2015, Sheraton Society Hill (Philadelphia, PA, U.S.A.), Nov. 4 - Nov. 8, 2015.（発表確定）

② 鵜野 ひろ子、エミリ・ディキンスンとヘレン・ハントジャクソン、シンポジウム Women's Friendship and Literature（招待発表）、ICU ジェンダー研究センター（東京都・三鷹市）、2013 年 2 月 16 日

③ 鵜野 ひろ子、エミリ・ディキンスンと日本（の花）、日本英文学会関西支部年次大会（招待発表）、京都大学（京都府・京都市）、2012 年 12 月 22 日

④ Hiroko Uno, The Study of Emily Dickinson's Poetry in Japan, Symposium "Globalizing the Study of American Women Writers"（招待発表）, Triennial Conference of the Society for the Study of American Women Writers, 2012, Downtown Denver Westin (Denver, Colorado, U.S.A.), Oct. 10-13, 2012.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
鵜野　ひろ子（UNO, Hiroko）
神戸女学院大学・文学部・教授

研究者番号：　３０１４５７１８

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：